

研究会報

第13号 (復刊 第143号) 2016・12



(写真1)「お日待ち」朝のお勤め 平成26年 本座宅

近現代における宮座の変容と持続

— 江辻の「お日待ち」を事例として —
ひま

山口信枝

一 はじめに

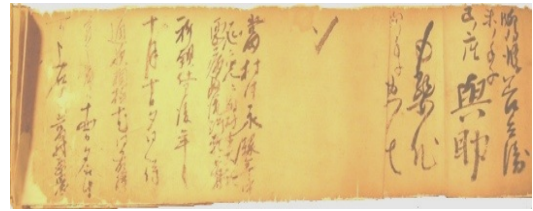
本稿は近現代における宮座の変容過程を実証的に調査し、宮座の存在意義と持続要因を考察することを課題としている。これは拙著『宮座の変容と持続①』に続く調査報告である。この研究事例として「お日待ち」、あるいは「御座」と呼称される祭りを取り上げる。この祭りは福岡県糟屋郡粕屋町江辻に引き継がれている(写真1)。

宮座は一般的には「神事について独占的な権能を氏子内部においてもつ

集団②」とされているが、その定義については統一されているとはいえず、「特権的祭祀組織」③と「神事組合」④説⑤がその代表的なものである。宮座はその加入資格において、一定の家筋に属する者に限られる株座と、氏子であることが参加条件とされる村座の二類型が設定されている。

本稿では「宮座は産土神社において座と称する祭祀集団であり、株座と村座を含む」という基本理解のもとに考察をおこなう。これまでの調査によると、宮座はその地域の宗教行事のみならず、日常的に地域の政治、経済、社会、人間関係と密接に結びついており、村落共同体におけるさまざまな場面において宮座構成員が関係してきたことを明らかにしてきた。

「お日待ち」は座員が退会した場合、新たな加入は認めず旧来からの家筋を守る株座である。調査はこれまでと同様に聞取調査と座に引き継がれる史料『古記録⑥』(写真⑦)を参考にした。



(写真2)『古記録』

祭りの開始由縁や出席者名、決め事、出来事が記されている。

本稿では平成二五(二〇一三)年と平成二六年の祭事執行の様態を中心として紹介し、その後考察をおこなう。

以下、日待は「お日待ち」、座元は本座(ほんざ)、手伝役は手子(てご)、座の構成員は座員、「座頭さん」は座頭と表記し、敬称は略させていただいた。

二 地域の概要

粕屋町は福岡県西北部、福岡市の東隣に位置し、駕輿丁(かよいちよう)池をはじめとする大小

のため池が点在している。糟屋炭田のひとつ、かつての国鉄志免炭鉱の石炭採掘により出来たボタ山が粕屋町、志免町、須恵町三町の境界にまたがっており、

交通の利便性が高い町である。面積は一四・一三平方キロメートル、人口四万六一二五人、世帯数一万九一八八世帯である(平成二八年八月末現在)⁽⁸⁾。平成二七年の合計特殊出生率は二・

一三人⁽⁹⁾で、平成二八年の高齢化率は一七・三パーセントである⁽⁸⁾。内閣府の報告書『選択する未来—人口推計から見えてくる未来像—』では「子育て世代が多い町」として紹介されている⁽⁹⁾。

本調査地である粕屋町江辻の産土神社は部木(へき)八幡神社である。神社が寛文二二(一六七二)年に龍尾から部木に移転した時には神田として五反余を氏子が寄納したと記されているが⁽¹⁰⁾、現在神社が保有する田圃はない。また座員の檀那寺はほとんどが曹洞宗の弥勒寺である。ともに旧糟屋郡多々良村蒲田に

位置しているが、その後この地区は福岡市に編入されて現在の地名は福岡市東区蒲田である。

「日待」とは前夜から潔斎して寝ずに日の出を待つて拝む祭りである。地元では「お日待ち」と呼称されている。江辻一〇〇軒といわれ二八軒が座員であったが、現在は一三軒で構成されている。このうち八軒が「松永」姓である。座が保有する『古記録』によると、神事の開始は「永禄年中(一五五八〜七〇年)に悪疫が流行したため、その退散のために開始された」と記されており⁽¹¹⁾、平成二八(二〇一六)年現在で約四五〇年間持続している。

祭りは部木八幡神社の宮司ではなく、座頭が執り行う。座頭は福岡県糟屋郡篠栗町、篠栗四国八十八箇所第十五番札所妙音寺の住職である。祭りは籤引きで選ばれた本座一人、手子二人で引受ける。本座一回、手子二回の引受で籤の対象からはずれる。全員が終了すればまた最初

から全座員が籤の対象となる。「お日待ち」は十月に執行されており、その日程は一〇日(とうか)日待ち、二〇日(はつか)日待ちがある。三〇日日待ちの座は座員減少のため中止している。一〇日の座は「尤同日故障之有節八十四日夕取斗可申」として「その日に出来なければ一四日にすること」と記されている。

昼の直会(なおらい)神祭終了後、神饌や神酒のおろし物を参加者が分かち飲食する行事)では、座頭の着座を上座として、座員は左右年齢順に着座していく。息子に代わりをすると、それまでの父親の座順ではなく年齢順で下座になる。

以下、人口増加が続く都市化した地域に持続する「お日待ち」の様態を記し考察をおこなう。

三 「お日待ち」とは

「お日待ち」は十月に執行されており、その日程は一〇日(とうか)日待ち、二〇日(はつか)日待ちがある。三〇日日待ちの座は座員減少のため中止している。一〇日の座は「尤同日故障之有節八十四日夕取斗可申」として「その日に出来なければ一四日にすること」と記されている。

昼の直会(なおらい)神祭終了後、神饌や神酒のおろし物を参加者が分かち飲食する行事)では、座頭の着座を上座として、座員は左右年齢順に着座していく。息子に代わりをすると、それまでの父親の座順ではなく年齢順で下座になる。

以下、人口増加が続く都市化した地域に持続する「お日待ち」の様態を記し考察をおこなう。

以下、人口増加が続く都市化した地域に持続する「お日待ち」の様態を記し考察をおこなう。

以下、人口増加が続く都市化した地域に持続する「お日待ち」の様態を記し考察をおこなう。

以下、人口増加が続く都市化した地域に持続する「お日待ち」の様態を記し考察をおこなう。

以下、人口増加が続く都市化した地域に持続する「お日待ち」の様態を記し考察をおこなう。

以下、人口増加が続く都市化した地域に持続する「お日待ち」の様態を記し考察をおこなう。

以下、人口増加が続く都市化した地域に持続する「お日待ち」の様態を記し考察をおこなう。

以下、人口増加が続く都市化した地域に持続する「お日待ち」の様態を記し考察をおこなう。

四 「お日待ち」の準備

青藁の準備

「お日待ち」に用いる青藁は本座が所有する田圃の稲藁を使用する。座頭が祭りの前日に本座宅で注連縄や藁苞馬(わらづとう



(写真3) 左編い七・五・三下がり

まの形に作る。現在座が保有する田圃はない。近年の稲は倒れないように丈が短く品種改良されており、コンバインで刈り取られた後の藁は田圃に鋤き込まれる。このため本座は人に稲刈りを依頼している場合は、大束で三束分残してもらおうように手配する。藁は選る(すぐる)稲の茎以外を落として綺麗な茎だけを選ぶことので細くなる。このため大きめの束で用意しておく。藁は刈り取り後二日間乾かして緑色が消えないように保つ。祭りの前日に本座宅で座頭が藁で作った馬形は、本座と座頭が床の間に飾りつける。祭事用として左編(ひだりない)の「七・五・三下がり」で編われた縄は(写真3)

床の間と玄関入口の二本の竹に飾りつける。

竹の採取

座員はそれぞれ竹の採取場所を知っておかなければならない。平成二五(二〇一三)年の場合は前日に竹を切り用意した。雄竹は江辻山(財産組合所有)、雌竹は小学校前の川側にあるものを準備する。

ドジョウ

「お日待ち」の座は三座あるが、川でドジョウを獲る座の順番は決まっており、一〇日日待ちが一〇日、二〇日日待ちが二〇日、現在は座を中止している座が三〇日の順番であった。ドジョウは田圃の畦や川で座員が捕まえていたが、三本の川が集まる雨水橋(あもうずばし)のところが良く獲れていたという。今では川でドジョウが獲れなくなり、福岡の漁業市場や、二日市の養魚場の川魚専門店に仕入れを頼んでいる。平成二五年に購入したドジョウの量は一・五キログラムであった。本座はドジョウが確保できているか心配で、店に

電話を二度かけて確認した。本座は常に落ち度がないように気を配りながら役割を全うする。

ドジョウ汁作りは現在も男性の役割である。東京の有名ドジョウ汁屋に向いて研究する人、圧力釜を使って自宅準備をする人等、それぞれ料理方法へのこだわりがある。

その他

餡餅は購入する。以前は手作りしていた。その当時の様子をはじめ江辻の「お日待ち」については、江辻区で出版した『江辻移転四〇〇周年記念誌 江辻の成り立ち』に写真で詳細に紹介されている⁽¹²⁾。餡餅は個別に包装されており、「松永」姓が多いため名前が書かれている。

五「お日待ち」の様態

—平成二五年の祭りを事例として—

午前六時 朝のお勤め

座員は本座宅の庭に東方に向けて敷かれた座布団に着座する。暗闇の中、座頭が大蠟燭に火を

灯し約二〇分間の読経が行われる。お勤めは二礼二拍手で開始され、般若心経と観音経が唱えられる。神仏混淆の儀礼が含まれたお勤めである。お勤め終了時には空が白み始める。座員にお茶が振舞われた後一旦解散する。その後午後一二時に再度本座宅へ集合する。座頭は住職であるが、土地の人は「座頭さん」と呼んでいる。地域の祭りである荒神祭では琵琶を弾き、家の新築祝、山の木を切る、家を扱う、井戸を埋める時等に祈禱の依頼があるという。「座頭さん」という言葉が日常生活のなかに普通に生きている。

本座と手子は庭に敷かれたビニールや座布団等の後片付けをする。その後手子は一度自宅へ戻り朝食を済ませた後、すぐまた本座宅へ向かう。本座宅の納屋でドジョウ汁作りやその他随時本座の手伝いをしながら午後のお勤めの準備を進める。座員は一三人中一二人が出席した。

三年程前(平成二二年)迄は前夜から本座宅に泊まり込んでい

た。午後一〇時と夜一二時、翌朝七時に食事が用意された。夜間は本座宅で囲碁や将棋、花札等をしていた。夜は若い後継者が出席することもあった。

午前八時

「ヒル(昼)」の料理作り

本座と手子の妻達が本座宅の台所で午後の直会に出す祭事料理を作る。ドジョウ汁作りは本座と手子三人の男性が担当する。本座は注文していた店から祭の前日にドジョウを受け取り、バケツに入れて水面に藁をかぶせて準備していた。

午後一二時 昼のお勤め

座員は注連縄と雄竹で飾られた本座宅の入口で手を洗い集合する。床の間には「日天子尊」(写真4)と書かれた軸が掛けられている。日天子(にってんし)とは、太陽を神格化したものである。一一時四五分から座頭による読経開始。朝とは異なり、昼のお勤めでは三拍手三礼で読経が始まる。座頭の説明では神道が馴染みやすいので拍手をするということである。三拍手は一拍手



(写真4)「日天子尊」の掛軸前で昼のお勤め

が強く、二・三拍目は弱く拍手をする。一二時に読経が終了。本座と手子は接待のために長机を二列に配置し座布団を並べる。本座と手子の妻達による配膳が開始される。部屋は二間続きにして広さ一四畳の部屋である。本座の挨拶があり、座員の最年長者が献杯を行う。酒席には若い後継者が当主の代理で出席していた。本座と手子が酒の熱燗を注いで廻る。ドジョウ汁のお代りをする人、餠餅を食べる人もいる。「酒の燗付けが熱い」、「酒の準備に時間がかかり過ぎる」等の叱責の声もかかる。



(写真5) 数珠の房に籤が付く

午後三時

本座と手子の籤引き

次年度の本座引受候補者の名前を書いて丸められた小紙(籤)が盆に置かれている。座頭が盆の上で読経しながら、手に持つ数珠を盆の上にかざすと数珠の房先に籤が付き持ち上げられる。数珠に着いた籤を本座が座頭から受け取り、籤を開いて名前を読み上げる。読み上げられた籤は本人へ渡される。続いて手子二人についても同様に籤が持ち上げられて決まっていく(写真5・6)。名前が読み上げられる度に歓声が湧く。平成二六年の本座籤が当たり喜びと驚きの新本座(写真7)とそれを祝福する座員の姿が見られた。この年は



(写真6) 翌年の手子引受籤

後日

「ぜん(膳)・銭(かひご)」

祭りの後一週間以内に本座が費用の清算をして手子が集金する。これを「切り立て」という。費用の清算時には御札とお飾りの二重餅を切り分けて各座員宅へ持参する。平成二五年の経費負担額は一軒あたり五二〇〇円であった。欠席は一軒であり飲食代を差し引いて、神前の供え



(写真7) 喜びと驚きの新本座(奥)とそれを祝う座員達

物の分担額が集金された。祭りで渡される御札は座員一三軒に配布される。なお祭りの後に手子夫婦を本座宅に招いての慰労会は、三年程前(平成二二年)から廃止された。

翌年

「御日待連名帳函」引継

旧本座は「御日待連名帳函」を年明けて五月の連休中もしくはお盆過ぎ迄に、新本座宅に持参して手渡す(写真8)。



(写真8) 御日待連名帳函と写真帳

『古記録』・写真・覚書等が納められている。

六 女性の役割

女性は「お日待ち」の座には参加しないが、「ヒル(昼)」の料理は本座と手子の妻達による手作りである。前年までの献立が写真帳や壁紙大の一覧表に図入りでまとめられている。また食材の価格や反省等が記録として詳しく引き継がれている。本座は調理に使用する材料の買い物や包丁研ぎ、台所用品を確認し、ガスボンベも借りておく。平成二六年はガスボンベ一五キログラムが使用された。

女性は「お日待ち」の座には参加しないが、本座引受は家と

して榮譽であり喜びである。妻も重責を負うことになる。平成二五年本座引受の妻はかつて結婚四年目で本座引受になった。当時の祭事は通夜(つや)も含めて三日がかりで執行されていた時代である。妻の実家は福岡市箱崎であり粕屋町とそれ程遠く離れていないが、「お日待ち」の祭りは知らなかったという。江辻の「お日待ち」は女性の存在なしには進行しない。平成二七年の本座引受者は籤引き決定後すぐに妻に電話を入れていた。平成二六年の本座引受者の話によると、父親が本座を引受けた昭和三〇年頃はまだ本座宅で通夜がおこなわれていた。そのため仮眠をとる座員のために母親と祖母が二八個の枕を手作りで用意した。また昔は本座になると障子や襖を張り替え替え替えて接待していた。これは多大な出費であり、当主としては一世一代の大仕事であった。しかしその一方で座員が二八軒の時代では、本座の引受が回ってくる頃は、当主として家の手当

てをするのに丁度良い機会でもあったという。

座員によると、「お日待ち」の日はいつも晴れて青空で、気持ちの良い風が吹いていた。季節の気温は昔と今では変化しており、昔は長袖を着て着物姿で足袋を履いて出席していた。現在は昔ほど寒くはなくブレザー姿で出席している。

七 組の集まり

江辻では日常生活においても下記のような集まりが昔から継続しており、人と人が集まる地域の結びつきがある。また組により異なるが平成二〇年頃までは葬式の手伝いであるお斎(おとぎ)が組で行われており、近所の人々が集まって料理を作っていた。現在は葬儀場で弁当を注文することが出来る。

参宮同行(さんぐうどうぎょう)

江辻全体で実施している。結婚して親となった三三〜三五歳頃に、二〜三歳間隔の年齢別男女別グループで、伊勢神宮にお参りに出かけている。この時の

仲間は年齢が近く悩み事も共通することが多く、以後日常生活の中で困った時の相談相手として長い付き合いが継続している。

お観音様

西組では毎月一七日に女性の集まりがある。江辻地区は、東・西・南・北と雨水の五組で組割りされており、それぞれ組単位で運営されている。西組はそのひとつの組である。

お庚申様

西組では二か月に一度廻って来る庚申(こうしん)の日に、男性のみが参加する。夏は夕方七時三〇分、冬は七時頃に集まる。以前は本人が出席出来ない場合は代わりに女性が出席することもあったが、現在では男性だけの集まりである。

江辻は昭和三二(一九五七)年に旧糟屋郡大川村から粕屋町となり、蒲田は昭和三〇年に旧糟屋郡多々良町から福岡市東区へ編入された。学区区をはじめ公的行政区の分断は日常生活を含め氏子間の交流も途絶える要因になると考える。しかしこの

地域では昔ながらの人々の交流や結びつきが現在も持続している。江辻の人達にとつて産土神社は部木八幡神社であり、弥勒寺が檀那寺であることに変わりはない。旧糟屋郡としての歴史が日常生活の中で持続されており、神社やお寺の役員として江辻地区から各代表者が出て地域の運営に参加している。平成二八(二〇一六)年の部木八幡神社の下草刈りは、粕屋町江辻の氏子が担当しており、行事の中で集合と交流が繰り返されている。

八 おわりに

これまでの調査結果として、それぞれ多様な形をとりながら現代も持続している宮座の機能と存在意義は、(一)ムラの団結と統合意識の強化(ムラの自治運営)、(二)自己認識の獲得、(三)ムラの秩序の確認(伝統意識の保持)、(四)親族交流であると考えてきた¹³⁾(以下「ムラ」は「村落共同体」の意で使用する)。しかし今回の「お日待ち」調査に

より宮座機能の一部修正が見出された。それは(四)親族交流は「人と人の集合と交流」とした方がより適切ではないかと考える。かつての「お日待ち」では次世代の後継者が年配の父親の代理として体力を要する通夜の席に出席していた。また現在でも酒が飲めない父親の代わりに息子が酒席の相伴役として昼のお勤めに出席している。この祭りの場で若い後継者は年長者から祭りのしきたりや歴史、年長者に対する応対や酒宴での振舞い方を学ぶ。酒の爛のつけ方にしても座の先輩から叱責を受けながら学んでいる。それと同時に座員と顔見知りになり、世代間の情報交換や人と人の繋がりが出来る。また若い頃から祭りを見ることにより、次世代交代が円滑に進んでいるようにも見受けられた。祭りの中での人と人の集合と交流が社会生活の学びの場として機能しているといえる。

また女性は座には参加しないが、本座の妻は手子役の妻達と

ともに、自宅の台所という私的空間を開放して祭りの料理作りを担う。一方手子の妻は本座宅の台所で手子の妻としての役割を務める。本座宅を開放して使用する付き合いは、現代社会では躊躇されることであろう。その一方で祭りの協同作業のなかで日常会話が弾む。評判の良い飲食店やスーパーマーケット情報、市街化調整区域で家を新築するための助言、あるいは年頃の男性や女性の話も出てくる。一方ドジョウ汁作りは家の外で男性が担当していたが、こちらもドジョウ汁談義や日常生活の情報交換、世間話等がおこなわれていた。

祭りが持つ存在意義と機能のひとつは、祭りを執行するなかで祖先を認識する、ということにある。これにより自己認識が行われる。そして子孫へと続く自己存在の連続が確認される。ムラの自治意識の希薄化や自己認識の喪失感、社会生活の営みが問題視される現代社会において、改めて有効な手掛りを示し

ているのではないだろうか。それとともに「お日待ち」をはじめとして産土神社や檀那寺の世話役としての各種集合の繰り返しにより、ムラの団結と統合意識が強化されているのではないかと考える⁽¹⁴⁾。

一方「お日待ち」は特定の家筋の男性だけが参加する株座である。この封鎖性が意味するものとは何であろうか。座の封鎖性はムラ人自身の存在確認であり、ムラの内側に向けて働く力である。座はムラの外では何の権力も効力も有さず無関係である。よって封鎖性という言葉がムラ社会の不自由さをもたらす排他性という言葉と同一語化され、否定されることのないように区別されなくてはならない。そして座の持続要因の一つとしてこの封鎖性があるのではないかと考える。ムラで生活する人達にとってはそれが必要とされてきた。座がその封鎖性を維持し、ムラの統合機能の一部を受け持つものとして持続しているかどうか、これが座が持続する

要因のひとつになると考える。

近現代における社会や人間関係等は様々な要因が交錯しており、宮座の視点だから考察することには勿論限界がある。しかし江辻の「お日待ち」が現在も持続し、座員間の統合をはかり、ムラを運営していく重要な契機になっている。

今後は途絶えた事例を含めて宮座調査を継続して、更に研究を深めていくことを課題とする。

註

- 1 山口信枝『宮座の変容と持続―近現代の九州北部における実証的研究―』（弦書房、二〇一〇年）。
- 2 「宮座」の項目（『縮刷版』社会学事典）弘文堂、一九九九年。
- 3 中山太郎『宮座の研究』（『社会学雑誌』六、一九二四年）。
- 4 肥後和男「近江に於ける宮座の研究」（『東京文理科大学紀要』一六、一九三八年）。
- 5 『古記録』は本座に引き継がれる史料である。内容は祭りの開

始由縁や出席者名、決め事、出来事が記されている。なお永禄「年中」は年間と解釈した。

6 粕屋町ホームページ「粕屋町の人口」（平成二八年八月末日現在）。

7 粕屋町ホームページ「粕屋町人口ビジョン まち・ひと・しごと創生総合戦略 概要版」粕屋町（平成二八年三月）二頁。

8 福岡県ホームページ「福岡県の高齢者人口及び高齢化率の推移」（平成二八年四月一日現在）。

9 内閣府「選択する未来―人口推計から見えてくる未来像―」（平成二七年一〇月）二二二頁。

10 江辻区刊行冊子編集委員会編『江辻移転四〇〇周年記念誌「江辻の成り立ち」』（福岡県糟屋郡粕屋町江辻区、二〇〇一年）四三頁。貝原益軒『筑前国続風土記』巻之十八、六九頁。

11 寛延三年から明治一七年までの日付が確認されたが、一部表紙の錯簡があるように見受けられた。再度確認を要する。

12 前掲『江辻の成り立ち』六六～六九頁。

13 前掲『宮座の変容と持続』三〇六～三一頁。

14 同前、三〇六～〇八頁、三一四頁。

参考文献

原田敏明『村祭と座』中央公論社、一九七六年。

付記

本稿作成にあたり、お世話になりました皆様方に深く感謝し御礼申し上げます。

松永好昭様（平成二五年本座）には「お日待ち」調査の許可を始め座員の皆様方との仲介をとっていただきました。松永徳壽様（平成二六年本座）は初回調査時に部木八幡神社に案内していただき、ありがたいご教示をいただきました。お二人は度重なる問い合わせにも快くご回答下さいました。新宅信久様からは入手困難な『江辻の成り立ち』いただきました。松永メイ子様からは粕屋町史料についての確なご教示をいただき、助けていただきました。

研究会からのお知らせ

第一七〇～二六回懇話会開催

福岡市中央区天神一丁目久留米大学福岡サテライトにおいて、二〇一五年二月から二〇一六年一月までの期間に合計一〇回の懇話会と二年度の会員総会を開催しました。懇話会の報告者とテーマは以下のとおりです。

なお、懇話会の報告内容と当日の配付報告資料の一部、および会員総会の報告と総会議案書は研究会のサイトに掲載していますのでご覧ください。

【第一七〇回】二〇一五年二月四日
八嶋義之氏『新修 福岡市史』編纂における調査の状況について
—新出史料の紹介を中心に—

【第一八〇回】二〇一五年四月二五日
秀村選三氏「近世九州農村における下人」奉公人・日雇の類型

【第一九〇回】二〇一五年六月二七日
山田秀氏「戦前期における朝倉郡域の鉄道網形成について」
*終了後、二〇一五年度会員総会開催

【第二〇〇回】二〇一五年九月五日

久保知里氏「近世後期〜明治初年における福岡藩無足組菅家の動向」

【第二一〇回】二〇一五年十一月四日
竹下幸一氏「佐賀藩藩主の家系における寿命の研究」

長野暹氏「大村藩における明治初期の藩政改革」
【第二二〇回】二〇一六年一月三日
萩尾明彦氏「武谷水城について」
—太宰府市史落穂拾いの試み—

【第二三〇回】二〇一六年三月五日
石畑匡基氏「糸島地域の史料状況」
—伊都国歴史博物館
— 収蔵を中心に—

【第二四〇回】二〇一六年四月三日
江藤彰彦氏「藩政中枢の機構と記録体系」
— 分節的な支配と記録体系—

【第二五〇回】二〇一六年六月二五日
梶嶋政司氏「近世の漁場権益と明治期の魚場争論」
—福岡藩士の遊漁と浦—

*終了後、二〇一六年度会員総会開催
【第二六〇回】二〇一六年一月五日
吉田洋一氏「亀井南冥と朝鮮通信使」

懇話会の開催と

報告者の募集について

今年度内の懇話会は、年明けの一月二一日(土)と三月四日(土)に久留米大学福岡サテライトで開催する予定です。ご参加ください。

懇話会の報告者も募集しています。ご希望の方は事務局にご連絡ください。なお、報告資料の印刷等お手伝いが必要な場合も、遠慮なく事務局にご相談ください。

当会誌への投稿について

この『研究会報』の原稿を随時募集しています。今回は久々の発行になりましたが、できるだけ定期的に発行できるようにしたいと考えていますので、多くの会員の皆様からのご投稿をお待ちしています。

『研究会報』の発行は、研究会のウェブサイトで公開ですが、サイト上でPDFファイルを提供することにより印刷物の刊行に代えています。ファイルダウンロードすれば、印刷し

ていただくことが可能です。なお、印刷版は懇話会など研究会の会合で配布しています。印刷版が必要な場合は事務局へご連絡ください。

会則に定める研究会の目的に沿ったものであれば、原則として内容・形式を問いませんが、本格的な印刷作業ではないため使用できる文字や割付けなどに制約がでる場合があります。編集委員会から若干の修正をお願いする場合がありますので、あらかじめご承知ください。

原稿はできるだけ電子データで提出していただくようお願いしていますが、手書きでも結構です。字数は特に制限していませんが、八千字以上になる場合にはあらかじめご相談ください。

研究会報 第二三〇号
(県史だより 通巻第一四三号)

平成二八年二月一九日発行
編集・発行
地域史料研究会・福岡
jimukyoku@chirikishi.com
http://www.chirikishi.com